団地高齢者を対象としたコミュニティ活性化プログラムの実施

桜美林大学 澤井ゼミ
〇宗形 直緒人 杉本 一樹 坂本 祐太 三木 まどか 石川 沙樹 照井 真美 澁澤 岬
馬場 萌 島田 南菜子 高橋 里菜

1,緒言

1-1 人口の高齢化

内閣府の発表した「平成 26 年版高齢社会白書」によると、日本の総人口に占める 65 歳以上の人口の割合（高齢化率）は、26.0%(前年 25.1%)と総人口の4分の1を占めている。平成 2 年(1990 年)の 12.1%から高齢化率が急速に増加しており、平成 32 年（2020 年）は高齢化率が 29.1%になり、さらに平成 72 年（2060 年）には高齢化率が 39.9%に達し、2.5 人に 1 人が 65 歳以上になると予想されている。

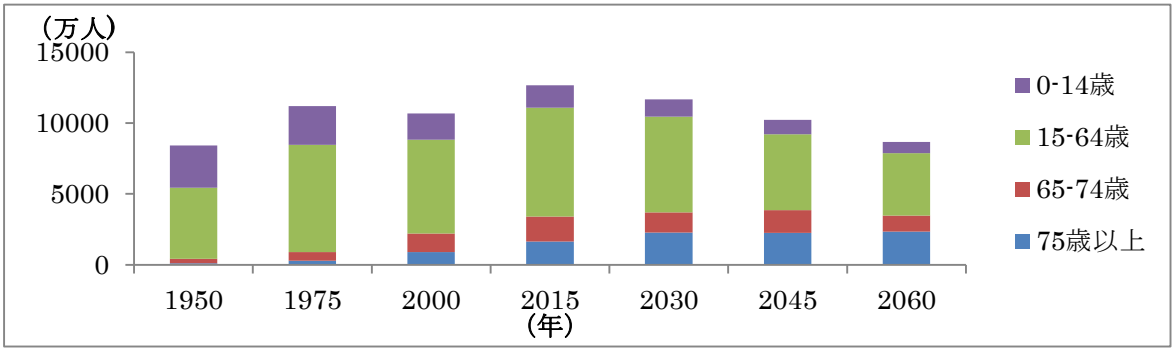

図 1：高齢化の推移と将来推計

1-2 団地の高齢化率とその背景

とくに近年、団地住民の高齢化が問題になっている。戦後の経済成長期に郊外に団地が建設されて多くの人が移り住んだが、そうした住民が同時に年を取る一方で若者の流出が止まらず、地域の高齢化が進むとともに高齢者の単身世帯率が高くなる傾向があると言われる。町田市も団地と共に発展してきた街であるが、たとえば町田市全体では高齢化率（65 歳以上の割合）は 25%だが、山崎団地では 40%、木曽団地では 34%に上る。また、高齢化率の高い地区はたいてい団地を抱える地区である（平成27年町田市町丁別男女別年齢別人口）。

1-3 高齢者の孤独死

こうした団地における高齢者の孤独死も問題になっている。内閣府による高齢社会白書（平成 24 年度版）によれば、一人暮らし高齢者の増加は男女ともに顕著であり、一人暮らし高齢者が高齢者人口に占める割合は、昭和 55（1980）年には男性 4.3%、女性 11.2%であったが、平成 22（2010）年には男性 11.1%、女性 20.3%となっている。東京都監察医務院が公表しているデータによると、東京 23 区内における一人暮らしで 65 歳以上の人の自宅での死亡者数は、平成 25

(2013)年に 2,869 人である。こうした高齢者の孤独死については、高齢単独世帯の増加や家族、地域のつながりの薄さなどが原因として考えられる。実際、内閣府のアンケートによると、一人暮らしの高齢者に、人との交流が少ない人や頼れる人がいない人が多く、会話の頻度が 2～3 日に 1 回以下の者が男性の一人暮らし高齢者だと 28.8%にのぼるという。

1-4 地域包括ケアシステム

一方、高齢化社会の進展に対し、厚生労働省では地域全体で高齢者を支える仕組みとして「地域包括ケアシステム」の構築を推進している。地域包括ケアシステムとは、自助、互助、共助、公助という複合的なサポートシステムであり、自助は、自らの健康管理、市場サービスの購入など自分のことを自分で行うこと、互助は、ボランティア活動、住民組織の活動など互いに支え合うこと、共助は介護保険などによるリスクの共有、公助は、税による公の負担である。団地のような高齢者化率が高い場所では共助、互助は、高齢者ばかりでこころもとないため、若い世代の支援が必要である。また、高齢者同士のつながりも重要であると考えられる。団地のような年齢階層の偏った地域において、こうしたシステムをどのように確立していくかというのは重要な課題であると思われる。

以上のような問題意識から、本研究では団地における高齢者の高齢化率や独居老人の現状およびその課題を把握するとともに、その支援策について検討、提案することを目的とした。

2,方法

町田市の団地の高齢化問題について、その現状や課題、取り組みを理解する為に、関係者の方々にインタビューを実施した。インタビュー対象や実施日は以下のとおりである。また、関係資料などを収拾し分析した。

表 1 インタビュー調査の実施記録

	実施日	実施場所	部署・役職
1	2015/06/03(水)	桜美林大学	町田ゼルビア後援会　事務局員
2	2015/07/22(水)	桜美林大学	町田ゼルビア後援会　事務局長
3	2015/09/02(水)	桜美林大学	桜美林大学地域社会連携室課長
4	2015/10/07(水)	桜美林大学	桜美林大学落語研究会
5	2015/10/20(火)	町田市役所	スポーツ振興課、高齢者福祉課

3,結果

調査の結果は以下の通りである。町田市がまとめた「町田市団地再生基本方針」(2013 年)によれば、団地の課題として、人口の減少、建物の老朽化、子育て世代の減少、高齢化率の上昇、団地センターの(商店や共用施設)の活力低下、コミュニティ活動の低下などが課題としてあげられている。

3-1 町田市役所の取り組み

こうした課題に対し、町田市役所では、スポーツ振興課が高齢者を対象とした「スポーツ推進委員による運動機会創出交流事業」を、高齢者福祉課では「高齢者スポーツ普及事業」、「ロコモティブシンドローム対策事業」といったイベントを実施している。互いに協力できるところは協力してやっているという。いずれのイベントも住民の関心は高く、毎回定員が埋まるほどの応募があるということだが、実際には参加者の約半数はリピーターであり、しかも参加者のほとんどが女性であるという。こうしたイベント参加に消極的な、とくに引きこもりがちな高齢者や高齢男性の参加者をどう増やすかが課題になっている。また、「スポーツ」と表現すると高齢者にはハードルが高いと思われるそうで、なるべく「スポーツ」という単語は使わないようにしているという。これらの様々なイベントは町田市の予算や文部科学省の補助金で行われており、大学は市との地域連携団体の1つであるため、町田市と大学の双方にメリットがあり、継続性のある企画であれば予算が付く可能性はある。

3-2 桜美林大学の取り組み

桜美林大学では、地域社会連携室の取り組みの一環として大学の落語研究会が山崎団地において講演会を行っている。現在までに3回の活動が行われ、毎回約 30～40 人ほど集まるなど好評で、男女比は半々くらいだったという。町田市の高齢者を対象とした運動・スポーツ企画に比べれば男性参加者が多いのが特徴である。落語だけでなく若者との交流を楽しみにしている高齢者も少なくないという。

3-3 UR 都市機構の取り組み

山崎団地を管理する独立行政法人都市再生機構(UR 都市機構)東日本賃貸住宅本部は、「無印良品」を展開する株式会社良品計画の企画・運営により、東京都町田市の町田山崎団地おいて防災関連イベントとして「DANCHI Caravan」を開催した。資金は UR 都市機構が資金を拠出し、無印良品やアウトドア用品を取り扱うコールマンジャパン株式会がテントなどキャンプ用品を現物支給した。また、町田山崎団地自治会や桜美林大学の学生がボランティアとして参加した。

4. 政策提言

以上のような調査結果をもとに、われわれは特に団地における高齢者を含むコミュニティの活性化を図るためのイベントの実施とそのための仕組み作りを提案する。

4-1 イベント内容

特に引きこもりがちな団地の独り暮らしの高齢者が地域住民や多様な世代と交流できる場をまず作ることが重要と考えた。そこで企画としては、最初から「運動・スポーツをする」プログラムではなく、「スポーツを観る」プログラムとして、団地センターや公園などでの「スポーツのパブリックビューイング」の企画を考えた。観戦するコンテンツとしては、高齢者に人気があると思われる「大相撲」や「高校野球」などが考えられる。町田ゼルビアやラグビートップリーグのキャノン・イーグルスなどトップチームの試合を当該クラブの元選手などの解説つきで観戦するということも考えられる。サッカーや

ラグビーなど若者が好むコンテンツでは、団地の高齢者との多世代交流が促されるような演出や企画を考える。町田市団地再生基本方針によると団地の住居者が重要と考える施設に気軽なレストランや居酒屋、散歩途中に立ち寄れるカフェが上位にあることからも、パブリックビューイングと同時に食事や会話ができるスペースを設けることにより交流の場となり、多くの人が参加するきっかけになる。多くの人が集まることによってコミュニティ増加と多世代交流につながる。

4-2 運営の実現可能性

こうした企画を実現するための人材の確保であるが、桜美林大学にはボランティアの支援をしているサービスラーニングセンターという機関があり、ボランティアに学生が参加をすることで単位を取得することができるというシステムがある。その制度を利用することでより多くの学生に参加してもらえる。

場所は町田市の団地再生基本方針にもあるように、団地センターを活用し、センター機能の活性化を図る。あるいは、中心に公園のある団地であれば、UR 都市再生機構の防災イベントと提携してオープンスペースでのパブリックビューイングも考えられる。

一方で財源としては、市役所へのインタビューによれば、開催するイベントや活動によっては、町田市の予算や文部科学省の補助金が出る可能性があるという。大学は市との地域連携団体の1つであるため、町田市と大学の双方にメリットがあり、継続性のある企画であれば予算が付く可能性が高いという。私たちの提言内容の活動に予算が付く可能性は、十分にあるという事であった。現在、町田市役所が行っている「スポーツ推進委員による運動機会創出交流事業」や「高齢者スポーツ普及事業」、「ロコモティブシンドローム対策事業」などのイベントも、町田市の予算や文部科学省の補助金で行われている。

4-3 研究の課題と限界および展望

このイベントを利用することで、コミュニティを活性化し、高齢者の孤独死防止や生きがいになると想定される。その中でもパブリックビューイングは団地内の施設利用や、過疎化しつつある商店街の協力によって多くの人が集まり交流することで、団地の活性化や町おこしになると考えられる。将来的にはそこで生まれたコミュニティを利用することで、健康増進を目的としたイベントに、高齢者が効果的に参加することができる。また、2020 年の東京オリンピック、パラリンピックでも団地内でパブリックビューイングを行うことで、高齢者もオリンピック、パラリンピックに参加し、幅広い世代で日本全体を盛り上げることが期待できる。

資料・参考文献

・内閣府「平成 26 年度、平成 27 年度　高齢社会白書」
・内閣府「平成 24 年度　高齢者の健康に関する意識調査」
・町田市「団地再生基本方針」（2013）、「平成 27 年度町田市町丁別男女別年齢別人口」